

論文内容要旨

コリジョン・コンタクトスポーツ選手の外傷性肩関節前方不安定症に対する鏡視下 Bankart&Bristow 変法—烏口突起の設置位置および手術成績—

日本関節病学会誌第 34 号第 1 巻 2015 年掲載予定

外科系整形外科学(藤が丘病院) 鈴木 一秀

目的

外傷性肩関節前方不安定症例において、術後再発率の高いコリジョン・コンタクトスポーツ選手に対する、鏡視下 Bankart&Bristow 変法（以下 ASBB 法）の術後臨床成績および術後可動域の推移と烏口突起の設置位置を検討することを目的とした。

対象および方法

術後 2 年以上経過観察可能であった男性 22 例（平均年齢 19.5 才）を対象とし、スポーツ復帰までの期間と術後成績（日本肩関節学会肩関節不安定症評価法：以下 JSSSIS と Rowe score）を検討した。また、33 例 35 肩（平均年齢 19.7 才）を対象とし、肩関節可動域を術後 1、2、3、4、6 ヶ月で計測し、直視下法（以下 OBB 法）と比較検討した。統計学的検討は可動域の推移には paired t-test を用いて 1%未満を有意差ありとし、直視下法との比較には Mann-Whitney U 検定を用い、5%未満を有意差ありとした。術後 4 ヶ月時の獲得可動域／6 ヶ月時の獲得可動域×100%を可動域回復率とし、術後 4 ヶ月でのスポーツ復帰の妥当性を検証した。さらに、男性 16 例（平均年齢 18.5 才）を対象とし、術後 3 ヶ月時の CT にて烏口突起の設置位置（横断面：Horizontal Position 以下 HP、矢状面：Vertical Position 以下 VP）とスクリューの挿入角度（横断像にて関節窩面と screw の角度：A-angle）を計測した。

結果

全例が平均 4.1 ヶ月でスポーツ復帰可能であり再脱臼例は無く、JSSSIS は平均 96.6 点、Rowe score は平均 95 点であった。可動域は全ての方向で経時的に有意な改善を認め、OBB 法との比較では、術後 4 ヶ月時点で屈曲と外転および 3rd 外旋の項目で、6 ヶ月時点では外転と 3rd 外旋の項目

で ASBB 法が OBB 法に比べ有意に改善していた。また、4 ヶ月時の可動域回復率は屈曲 96.5%、外転 96.9%、1st 外旋、90.3%、2nd 外旋 95.3%、3rd 外旋 97.1%であり、全ての可動域において術後 4 ヶ月で 90%以上の回復が得られていた。烏口突起設置位置では HP は平均-0.7mm、VP は平均 32.1° で A-angle は平均 23° であり良好な位置に設置されていた。

結論

ASBB 法の手技は良好な位置に烏口突起を移行可能であり、術後早期に可動域改善が得られ、再発例も無くコリジョンアスリートに有用であった。今後、再発率の高いコリジョン・コンタクトスポーツ選手の外傷性肩関節前方不安定症に対するゴールドスタンダードに成り得る手術法と考えられた。